

遺骨を置いて入居者が夜逃げ 引き取り手も無く保証会社が供養



▶日本賃貸保証は入居者に寄り添う考えで自社で永代供養を行う

入居者が大事なはずの遺骨を置いて夜逃げするなど、「人間関係が希薄になってきている」という声が上がるとは。指摘の通り、このことを象徴するような行事を行う家賃債務保証会社がある。

約60万件の保証契約件数を持つ日本賃貸保証（JID）は、千葉県木更津市では、賃貸物件に残された、引き取り手のない遺骨を供養している。7月10日、4回目となる「合同慰霊祭」を開催した。

『合同慰霊祭』とは、同社の家賃保証契約者に関する永代供養墓と、特に功労のあった同社の社員を祭（まつ）る企業墓の双方を供養する法要のこと。4年前から年1回、執り行っている。7月10日に行われた法要には、同社の井坂泰志会長、梅田真理子社長をはじめ、役員8人、社員10人が参加した。

同社が保証する賃借人のうち、親族などがおらず孤独死したり、夜逃げ同様で退去し、残置物に遺骨が残っていたりすることがある。その際に遺骨の引き取り

手がない場合、同社の永代供養墓に納骨する。

永代供養墓を建立したのは2013年。保証会社として、賃借人の残した遺骨まで責任を持つべきだと考えたことが始まりだ。以前は引き取り手のない遺骨の納骨を、地域の寺院や行政の協力を仰ぎ供養していた。都度、これらを行っていたことから自社での供養を検討しはじめ、11年の本社移転を機に永代供養墓建立に至った。

毎年数十体の遺骨が入り、現在では全国から集まった遺骨129柱が納骨されている。既に永代供養墓の半分以上が埋まっている状況だ。

実際に引き取り手が現れたのはわずか1件にとどまるが、中には遺骨を引き取りたいという声もある。これまでに数件、「生活基盤が整ったので引き取りたい」という相談が寄せられているという。

井坂会長は「保証事業は賃借人のためのもの。生活弱者も安心して暮らせるよう、今後も入居者に寄り添いたい」と話した。